

2022年4月17日佐土原キリスト教会礼拝説教

聖書箇所：マルコ 16章 1～8節

タイトル：ガリラヤでお会い出来る

イースター、おめでとうございます。ある時、キリスト教ラジオ放送を聴いていたら、「いつ亡くなるか分からないような方々ばかりを見ている」というお医者さんがこう言われました。「たとえそれがどんなことでも、将来に—(死んだ後のことも含めての将来に)—希望を見ることが出来る人は、今を生きて行くことが出来るのですよね」。ご自分の医療体験を交えてそう語っておられました。希望の大切さを改めて教えられる言葉ですが、私は、キリスト教信仰というのは、正に「将来に希望を見せる」信仰ではないかと思えます。コロナ禍、ウクライナ戦争等々、今年のイースターは、大変な中で迎えることになりました。しかし、イースターを迎え、私達は改めて聖書に教えられます。私達の主は、死を打ち破って甦られた方であるということ、その方は、私達をも死に勝たせて下さるということ、十字架という絶望は、神の御手の中で復活という祝福に変えられたこと、そして、この辛い世界も、その奇跡の御業をなさった—(今もなさる)—神の御手の中にあること、そのことに希望を見出すことができるのではないのでしょうか。そう思う時、私は「キリスト教信仰の中心がイエス様の復活にあること」、「『復活したイエスが今生きておられる』」ということを信じることにあること、そのことの重要さを改めて思わされる気がしたのです。

さて、「マルコ福音書」を順番に学んでいて、まだ途中ですが、やはり「マルコ福音書」から復活の記事を学ぶことにしました。なぜならマルコは、主の復活を前提に「福音書」を書いているからです。そしてこれから読んで行く箇所も、復活の光に照らしてもらおう時、良く理解出来ると思うからです。今日は「マルコ 16章」からイースターの語りかけを聴きましょう。

イエス様は金曜日の午後3時頃、十字架で息を引き取られました。ユダヤの1日は日没から始まります。安息日の始まりが3時間後に迫っていました。アリマタヤのヨセフの配慮によって、イエス様は応急処置のような埋葬の処置を受けてヨセフの墓に葬られました。15章47節に「マグダラのマリヤとヨセの母マリヤとは、イエスの納められる所をよく見ていた」(マルコ 15:47)と記されています。その女性達がここにも登場します。「さて、安息日が終わったので、マグダラのマリヤとヤコブの母マリヤとサロメとは、イエスに油を塗りに行こうと思い、香料を買った。そして、週の初めの日の早朝、日が上がったとき、墓に着いた」(16:1～2)。女性達の名前が繰返し記されているのは、証人の名前をしっかりと記して「イエスの十字架と復活」の出来事の史実性を明らかにしようとしているのだと思います。「確かにイエスは十字架で死なれた。しかし、その死なれたイエスが確かに復活された」ということを伝えたいのです。

彼女達は、土曜日の安息日が終わるのを待って、土曜日の日没後、店が開くとすぐに香油を買い求めたのでしょう。そして夜明けと共に墓に急いだのでしょう。彼女達の思いは「イエス様の体に香油を塗って丁寧に葬りたい」ということに集中していました。だから墓の入口に大きな石が置かれていることも、行く途中で気づいた、そこまでは意識していなかったのだらうと思います。ところが墓に行ってみたら、すでに石は脇に転がしてありました。そして中に入ってみたら「真白な長い衣をまとった青年—(天使でしょう)」が居て、メッセージを伝えました。「十字架につけられたナザレ人イエス…はよみがえられました。ここにはおられません…行って、お弟子たちとペテロに、『イエスは、あなたがたより先にガリラヤへ行かれます…そこでお会いできます。』とそう言いなさい」(6～7)。

ところが、ここには、その次に「女性達は喜びに溢れて、万歳、万歳と言いながら墓を出て行った」とは書いていないのです。「墓…から逃げ去った。すっかり震え上がって、気も転倒していた…そしてだれにも何も言わなかった。恐ろしかったからである」(8)とあるのです。私達には、なぜ彼女達が喜びに溢れたのではなかったか、なぜ恐怖に捕らえられたのか、不思議な気もします。彼女達の恐れの原因ははっきりとは分からない。でも想像することは出来ます。この女性達の恐れは「本当に神の業

に触れた者の恐れ」だったのではないのでしょうか。墓の入口の石について「あれほど大きな石だったのに、その石がすでにころがしてあった」(4)とあります。これは「神が石をころがして下さっていた」ということを間接的に表現した言葉です。彼女達は「神の超自然的な働き」の世界に自分達が踏み込んだのを感じたのではないのでしょうか。そして天使との出会い。「十字架で死んだイエスが甦った」とのメッセージを聞いたのです。死が打ち破られた、神が本当に死を打ち破った、自分達の理解出来ないことが起こった、神がそれをされた。そのことを肌身を感じた時、喜びもあったかも知れないけれど、全身を揺さぶられるような衝撃、驚き—(ある種の恐れ)—に捕われたのではないのでしょうか。あるユダヤ人の哲学者は「人はかつて経験したこともないような出来事…に出会うと、言葉を失い、ただ驚きの感情しか表せない」と言ったそうです。ある本にこんな話がありました。1人の女の子が—(キャンプか何かの時)—大きなバイクの近くで遊んでいました。ところが何かの拍子でそのバイクが少女の上に倒れて来ました。バイクの部品が少女の頭に食い込んでいるのが見えました。血が噴き出します。クリスチャンの両親は、助けを求めて神様に叫びました。「助けて下さい」。病院に担ぎ込まれて検査を受けた後、医者が言いました。「お子さんが生きておられることは驚くべきことです。この傷があと髪の毛数本分深かったら脳に穴が空いていたことでしょう」。少女は13針縫いましたが、その日の内に家に帰ることが出来たのです。両親は言っています。「私達は主のご臨在と御力を経験して、絶対的な畏敬の念に打たれ、言葉を無くしていた」。本当に私達の思いを越えた神の御業に触れた時、人は言葉を失うのかも知れません。しかも死が打ち破られたのです。「驚きを越えた畏れ」が大きかったかも知れません。

あるいは、イエス様の十字架の時、イエス様が愛し導かれた男の弟子達は皆、イエス様を捨てて逃げてしまったのです。女の自分達も結局、主が言われた復活を信じていなかった。復活されたということは、イエス様が本当に神なる方だったということです。その神なる方に対して、結局、弟子団は不信仰だったのです。そのことの恐れもあったかも知れません。

しかし、私達にとって重要なのは、「恐れの原因」よりも、8節が「恐ろしかったからである」で終わっているということです。どういうことかと言うと、聖書をお持ちの方は「マルコ福音書 16章」を開いて頂くと、今日の箇所次の箇所、16章9～20節は〔かぎ括弧〕で括られているのがお分かりになると思います。なぜ〔かぎ括弧〕で括られているかと言うと、「この部分はおそらく『マルコが書いたオリジナル』にはなかったであろう。後から初代教会の指導者—(あるいはマルコの弟子か誰かによって)—書き足された部分であろう」という意味で〔かぎ括弧〕で括られているのです。(もちろん「だから9～20節が大事でない」ということでは決してありません。神様の摂理の中で書き足され、「聖書の大事な言葉」として「マルコ福音書」の中に保存されたのです。だからこの部分も、大切な聖書の御言葉です。しかしオリジナルにはなかったらと思うれます)。では、なぜ書き足されたかと言うと、8節の「恐ろしかったからである」で「マルコ福音書」が終わるのは、終わり方として落ち着きが悪いと思われたからでしょう。『復活のイエス様が弟子達の前に現れる場面』がなければ落ち着きが悪いではないか、そう思って書き足されたのだと思います。

しかし問題は「なぜマルコは8節で自分の福音書を終えたのか」ということです。私達が読んでも、「恐ろしかったからである」で終わるのは落ち着きが悪い。ある人は「ルカが『ルカ福音書』と『使徒行伝』を自分の本の『前半』『後半』として書いたように、マルコも『後半』に当たる本を書こうとしていたのではないか」と考えます。そうかも知れません。あるいは、何らかの理由でこれ以上書けなくなってしまったのかも知れません。だから、そういう可能性も残した上で、しかし、もしマルコが8節で自分の「福音書」を終えようとしたのであれば、彼は何を意図したのでしょうか。どういう思いで、ここで自分の福音書を終えたのでしょうか。

それを考えるために、天使が語ったメッセージに注目したいと思います。天使は言いました。「行って、お弟子たちとペテロに、『イエスは、あなたがたより先にガリラヤへ行かれます…そこでお会

いできます』とそう言いなさい」(7)。この天使の言葉は何を意味するのでしょうか。1つは「イエスの甦りの意味」を示唆します。つまり「お弟子たちとペテロに…言いなさい」。ペテロがこのメッセージを聞いた時、どれだけ慰められたのでしょうか。彼は、イエス様を裏切った、そのことにどれだけ苦しんでいたのでしょうか。しかも、イエスが本当に神から遣わされた方であったならば、なおさらそうでしょう。その方をももの見事に裏切ってしまったのです。しかし甦ったイエス様は、そのペテロに真っ先に会おうとされました。つまりイエスの十字架は、復活は、「裁き」のためではなく「赦し」のためであること、そのことを何よりも表しているのです。

しかし「イエスは、あなたがたより先にガリラヤへ行かれます…そこでお会いできます」とは、どういうことでしょうか。ガリラヤは、弟子達がイエス様と最初に出会った場所でした。「その場所でイエス様との新しい関係が再び始まる」、そういう意味があったのではないのでしょうか。しかし、彼らがイエス様との関係を改めて始めることにおいても、イエスが弟子達よりも先に行かれるのです。イエスが弟子達に先立って行かれるのです。だから、そこで弟子達はイエスにお会い出来るのです。それはガリラヤだけのことではない。この後の弟子達の歩みは、いつもイエスが先立って行かれ、そこで弟子達はイエスにお会いするのです。弟子達が途方にくれた時、どうして良いか分からないような時、そこにイエスがおられ、そこで弟子達はイエスにお会いするのです。「ガリラヤへ行け、そこで会い出来る」というのは、そういうことが意図されているのではないのでしょうか。

なぜマルコは、途中で終わるような形で自分の福音書を終えたのか。それは、これから弟子達の前に現れて下さるイエス様のこと、いやこれから弟子達に先立って行かれるイエス様のことを、これ以上、自分の小さな本に書くことが出来なかったからではないのでしょうか。女性達は恐れました。しかし彼女達は、少し落ち着いてから弟子達に天使のメッセージを伝えたでしょう。そして弟子達はガリラヤに行きます。そこでイエスにお会いします。でも、そのことも含めて、これからイエス様が為さる様々な働きについて、弟子達とイエス様の新しい関係について、弟子達のイエス様経験について、マルコは自分の小さな本に閉じ込めようとは思わなかった。だから、もう書かなかったのではないのでしょうか。

いや、それだけではなく、先立って行かれるイエスの物語は、「福音書」を読む読者が、それぞれに自分で経験して行くことである、そのことを彼は確信していた。だから、それぞれが自分のこととしてこの物語の続きを経験するように、「あなた方自身がこの続き—(先立つイエス様との物語)—を書くのだ、だから私はこのイエスの物語を閉じることは出来ない」、そう言いたかったのではないのでしょうか。これが、マルコが8節の中途半端な形で自分の「福音書」を終えている意味ではないのでしょうか。

それはつまり、私達も先立って行かれるイエスにお会い出来るということです。ある人はガリラヤをこう表現しました。「ガリラヤ、それは弟子達にとって日常生活の場所であった。私達も日常生活のガリラヤにおいて先立つイエスにお会い出来るのである」。私達がイエス様にお会いするのは、何か特別の場所というのではないのだと思います。私達の日常生活が、私達がイエス様にお会い出来る場所なのです。そこでイエスにお会いすることを待望する、それがキリスト者の生きる姿勢ではないのでしょうか。

私は、私達の希望は、自分がイエス様の御手の中で生かされている—(星野富弘さんが「立っていても、倒れても、ここはあなたの手のひら」という詩を作っておられますが)—そのことを信じることに懸かっていると思います。どうして自分にこういうことが起こるのか、と思う時もあります。しかし、そこも神の御手の中である、そこにも先立つイエスがおられる、それを信じる、そこに希望は見出せるのではないのでしょうか。

先程「女の子がケガをした」という話を紹介しました。その少女のお母さんは、有名な「足跡」という詩を書いている方です。「足跡」は、小さな生活を精一杯生きようとする、でもそこには色々な

問題が起こって来る、しかしそこで神を経験した、そのことにインスピレーションを与えられて書かれたのです。「ある夜、私は夢を見た。私は、主と共に、なぎさを歩いていた。暗い夜空に、これまでの私の人生が映し出された。どの光景にも、砂の上にふたりの足跡が残されていた。一つは私の足跡、もう一つは主の足跡であった。これまでの人生の最後の光景が映し出されたとき、わたしは、砂の上の足跡に目を留めた。そこには一つの足跡しかなかった。わたしの人生でいちばん辛く、悲しい時であった。このことがいつもわたしの心を乱していたので、わたしはその悩みについて主にお尋ねした。『主よ。私があなたに従うと決心した時、あなたは、すべての道において、私と共に歩み、私と語り合っ下されると約束されました。それなのに、私の人生の一番辛い時、ひとりの足跡としかなかったのです。一番あなたを必要とした時に、あなたが、なぜ、私を捨てられたのか、私にはわかりません』。主は、ささやかれた。『わたしの大切な子よ。わたしは、あなたを愛している。あなたを決して捨てたりはしない。ましてや、苦しみや試みの時に。足跡がひとつだったとき、わたしはあなたを背負って歩いていた』(マーガレット・パワーズ)。イエス様が先立って下さるということは、こういうことではないかと思えます。これが、私達も経験して行くイエス様とのストーリーです。もちろん私達の目はイエス様を見ることは出来ません。でも、私達は「聖霊(見えないイエス様)」を通して、イエス様と具体的に歩くことが出来るのです。イエス様に導かれ、支えられ、励まされ、御業を受け、そして希望を与えられて生きて行けるのです。

私達がカナダで開拓伝道を始めた時、何の見通しもありませんでした。しかし、私達は知らなかったのですが、その時は教会会議の「伝道と教会成長委員会」という委員会が「これから開拓伝道を支援して行こう」と決めた時だったのです。私達のことを聞いて、その委員長がすぐに手を差し伸べ、私達が教会を立ち上げることが出来るように、道筋を整え、沢山の支援をしてくれました。今振り返ると、奇跡を経験したとしか思えません。そのようにして私達も、先立つイエス様を経験させて頂きました。

いずれにしても、私達も色々な形で先立つイエスを経験出来るのです。それを信じて待望するように、それがこの箇所のメッセージだと思えます。私達の現実には、困難の中で、生きておられる主を感じられないこともあるでしょう。弟子達もそうだった。しかし、神の計画は「弟子達が十字架で絶望する」ところでは終わっていなかったのです。神の計画には、絶望の向こうに「主の復活があり、新しい使命に生きる弟子達の姿があった」のです。私達に対する神の計画もそうです。絶望するところでは終わっていないのです。だからこそ、私達は主を待望出来るのです。神の計画は、私達の思いより遥かに深い。聖書は「希望は失望に終わることがありません」(ローマ 5:5)と語るのです。私達は、そのことを信じるのです。先立って行かれるイエス様を信じて、主との出会いを待望して、この信仰生活を歩んで行きましょう。主の復活を感謝します。